



免疫の図に出てきた薬まとめ

1. ステロイド性抗炎症成分

T細胞の機能を下げて免疫系にブレーキをかける。ステロイドは体内でも合成され、免疫バランスを保っている。化学合成したものが薬である。

2. 解熱鎮痛消炎成分：別名NSAID s（非ステロイド性抗炎症成分）

体内でプロスタグランジンの産生を抑えることで、炎症を止める。

3. 抗ヒスタミン成分

生体内の刺激物質である「ヒスタミン」と受容体の結合を邪魔する。

抗ヒスタミン成分と抗コリン作用

ヒスタミンとアセチルコリンの受容体は構造が類似しているため、抗ヒスタミン成分は時にアセチルコリン受容体にも作用する。第一世代の抗ヒスタミン薬の方がその傾向が強い。

4. 抗アレルギー成分

肥満細胞からのヒスタミン遊離抑制→アレルギー症状発現抑制。

ステロイド性抗炎症成分：副腎の復習

①副腎皮質ホルモン

●アルドステロン

水とナトリウムの再吸収と、カリウムの排泄促進作用がある。グリチルリチン酸は類似的作用を持つ。

●コルチゾール

抗炎症・抗アレルギー作用がある。
外用ステロイドはこれを合成したものである。

【参考】アンドロゲン：テストステロンなど
二次性徴、精子形成促進。いわゆる筋肉増強剤のステロイド。

②副腎髄質ホルモン

- (ノル) アドレナリン：交感神経刺激物質。

ステロイド性抗炎症成分：詳細

<頻出ポイント>

- 水痘（水疱瘡）、みずむし、たむし等、化膿している患部については症状を悪化させる恐れがある。
- 一時的な皮膚症状の緩和が目的である。広範囲に生じた皮膚症状、慢性の湿疹・皮膚炎を対象としない。
- ステロイド性抗炎症成分をコルチゾンに換算して※ 1g 又は 1mL 中 0.025mg を超えて含有する製品では、特に長期連用を避ける必要がある。

※ステロイドの薬効の強さは種類によってばらばらなので、コルチゾンの薬効を基準として濃度を換算し、一定基準を超えるものは長期連用しないということ。

解熱鎮痛消炎成分：非ステロイド性抗炎症成分

①イブプロフェン

- 抗炎症作用はアスピリンより強いとされている。
- まれに重篤な副作用として肝機能障害、腎障害、無菌性髄膜炎を生じることがある。
- 出産予定日12週以内の妊婦は服用不可。胎児循環持続症（呼吸困難）の可能性あり。
- プロスタグランジン産生抑制により消化管粘膜の防御機能を低下させるため、胃・十二指腸潰瘍、潰瘍性大腸炎又はクローン氏病の既往歴がある人では、それら疾患の再発を招くおそれがある。
- 一般用医薬品では15歳以上が対象。

※15歳以下の小児に使う解熱鎮痛成分は主にアセトアミノフェンである。他にエテンザミドとサリチルアミドも使用可能だが、水痘・インフルエンザの時は使用できない。その時はやはりアセトアミノフェンを使用する。

無菌性髄膜炎

特徴	発症は急性で、首筋のつっぱりが主な症状
原因物質	イブプロフェンやその他のNSAID s
症状	首筋のつっぱりを伴う激しい頭痛、吐き気等
経過	予後は比較的良好だが、後遺症が残った例もある
高リスクの人	全身性エリテマトーデス・混合性結合組織病（2つとも膠原病の一種）、関節リウマチ等の基礎疾患のある人

解熱鎮痛消炎成分：非ステロイド性抗炎症成分

②アスピリン（アセチルサリチル酸）

- 「アスピリン」と呼ばれるが、「ピリン系」ではない。
- 他の解熱鎮痛成分と比較して胃腸障害を起こしやすい。
- ライ症候群との関連性から、15歳未満の小児には服用させない
- 高用量で解熱鎮痛作用、低容量で抗血小板作用（血を固まりにくくする作用）。

解熱鎮痛消炎成分：非ステロイド性抗炎症成分

<その他の頻出ポイント>

- サリチル酸系
アスピリン、サザピリン、サリチル酸ナトリウム、エテンザミド、サリチルアミド等。ライ症候群と言えはサリチル酸系。
- アスピリン喘息
アセトアミノフェンを含め、どの解熱鎮痛成分でも起こりうる。
- エテンザミド
痛みを抑えるよりも痛みが神経を伝わっていくのを抑える働きが強い。
- ピリン系
一般用医薬品ではイソプロピルアンチピリンが唯一のピリン系成分である。解熱鎮痛作用は比較強いが抗炎症作用は弱い。ショックや湿疹（ピリン疹）等重篤な副作用が頻発した。

解熱鎮痛成分

16

アセトアミノフェン

- 作用機序不明だが、**中枢性**の解熱鎮痛作用を示す。**抗炎症作用は(ほとんど)ない。**
- プロスタグランジン産生抑制作用がほとんど無い。**胃腸障害は少なく**、空腹時に服用できる製品もあるが、**食後の服用が推奨**されている。
- ACE処方：**アセトアミノフェン、カフェイン、エテンザミド**。アセトアミノフェンがアスピリンに置き換わっているひっかけ問題が多い。
- お酒との相互作用
 - ①**肝機能障害**を起こしやすい
 - ②慢性飲酒をする者では、肝の代謝機能が高まっていることが多く、アセトアミノフェンが通常よりも**代謝されやすくなり**、体内から医薬品が速く消失して十分な薬効が得られなくなることがある。

抗ヒスタミン成分

17

①抗ヒスタミン成分全般について

- 慢性的に**使わず一時的**に使う。
×慢性的な不眠 ×慢性湿疹 ×長期連用
- メキタジン**
まれに重篤な副作用として(アナフィラキシー) ショック、肝機能障害、血小板減少。

【参考】

- 抗コリン作用：第一世代>第二世代
- 抗アレルギー作用：第二世代>第一世代

抗ヒスタミン成分

18

②酔い止めに使う抗ヒスタミン成分について

- 延髄にある嘔吐中枢への刺激や内耳の前庭における自律神経反射を抑える作用。
- メクリジン**：**遅効性だが長時間持続する。**
- ジメンヒドリナート**：テオクル酸ジフェンヒドラミンの一般名。

くらくらするほど
かわいいアイドル

【参考】ジフェンドール塩酸塩

抗ヒスタミン成分に名前が似ているが、**抗めまい成分**の分類として用いられるので注意。ただし、抗ヒスタミン作用も抗コリン作用もある。

抗ヒスタミン成分

19

③睡眠改善薬に使われる抗ヒスタミン成分について

- ジフェンヒドラミン塩酸塩**が使われる。
- 15歳以下、妊婦、授乳婦は使用しない。

抗アレルギー成分

- クロモグリク酸ナトリウム**を覚える。
- アレルギー性の症状でない場合は無効。
- O T Cでは通常、抗ヒスタミン成分と組み合わせて配合される。

その他の抗炎症成分

20

グリチルリチン酸：のどの薬、鼻炎薬、胃薬、点眼薬

- 甘草**に含まれる成分で、ステロイド性抗炎症成分に構造が似ていることから、抗炎症作用を示すと考えられる。
- 大量摂取で**偽アルドステロン症**(水とNaの再吸収とKの排泄)を生じるおそれがある。
- 医薬品として、**1日摂取量が200mg**を超えてはいけない。
- 医薬品として、**1日最大服用量が40mg以上**となる製品は長期連用を避ける。
- 甘味料としても使われるので、総摂取量に注意する。

その他の抗炎症成分

21

アズレンスルホン酸ナトリウム：のどの薬、胃薬、目薬

- カミツレ精油の主成分、カマズレン(カモミール+アズレン)の水溶性化合物。



トラネキサム酸：のどの薬

- 止血作用**を示す。**血栓のある人への使用は注意する。**

【参考】セトラキサート：胃粘膜保護・修復成分
胃で分解されて**トラネキサム酸**を生じる。

その他の抗炎症成分

22

アラントイン：歯槽膿漏薬、点眼薬、痔疾患用薬、外用薬

- ウジ虫から出る粘液に含まれており戦時中の負傷者の治癒を早めたと言われる。

【参考】アルジオキサ：胃粘膜修復成分+制酸成分

アラントイン(胃粘膜修復成分)と水酸化アルミニウム(制酸成分)の複合体。消化管内で分離。アルジオキサの「アル」はアルミニウムとのアル。アラントインの「アル」とも一緒に覚える。

ウフェナマート：外用薬

- 作用機序不明。プロスタグランジンの働きに関連していると言われる。
- 出題確率は低いが、顔に使用して、おむつかぶれなど小児にも使えることは押さえる。